



残酷な「異形化」：『ジョジョの奇妙な冒険』虹村兄弟と『鬼滅の刃』不死川兄弟の葛藤

植，朗子

(Citation)

神戸大学国際文化学研究推進センター研究報告書, 2021:72-87

(Issue Date)

2022-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013373>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013373>



残酷な「異形化」 — 『ジョジョの奇妙な冒険』 虹村兄弟と 『鬼滅の刃』 不死川兄弟の葛藤 —

The cruel metamorphosis and its effect on the link of
brotherhood: Focusing on the cases of the Nijimura
brothers (JoJo's Bizarre Adventure) and the Shinazugawa
brothers (Demon Slayer)

植 朗子
Akiko UE

I はじめに

人間の「異形化」¹⁾には、2つの命題が突きつけられる。人間が「人間以外の存在」へと変貌する物語は神話の時代から語られてきた。「異形化したモノ」は人間なのか、人間ではない別の存在なのか。「異形化したモノ」に人間だった頃の記憶や感情が残されている場合、かつてその人物を愛した者たちは、「異形化」の後にも、変わらずその人を愛し続けることができるのだろうか。

物語における異形とは、鬼や怪物のように、通常の生物とは異なる外観を持った「モノ」

¹⁾ 本稿の英語タイトルでは「異形化」を *metamorphosis* とした。本稿で取り上げているのは、いずれも「元が人間だった者」が人間とは違う肉体的特性を持つ「モノ」へと変化している事例であり、「外観的变化」という視点が明らかになるように *metamorphosis* を用いた。オウィディウスの『変身物語』(岩波文庫、1984年)の下巻にある中村義也の解説では、人間の動植物への変化を語る神話に以下のような説明がなされている。「ここにいわれている「変身」と言うのは、ギリシア語でいう「メタモルポーシス」であって、「モルペー」を変えるということである。そして、「モルペー」というのは、本来、「姿」とか「かたち」という意味であるから、「メタモルポーシス」というのも、「姿や外形の変化」であって、その意味からいえば、「変身」というよりは「変容」とか「変形」というほうが、より正確であるかもしれない。」とある。

人間が他の生物(他の人間、動物、植物)や、石などの無生物になって、魂が再生する物語はいわゆる転生譚である。しかし、本稿では、魂が他の肉体に宿る転生ではなく、肉体が変化する事例を扱う。転生(*Seelenwanderung*)の定義については以下を参照した。

Manfred Lurker: *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart, 1991.

がイメージされることが多い。つまり、異形とは「特殊な肉体を持つ存在」として想起されることが一般的であるが、実在する他の生物の姿になること、幽霊になること、精霊のような存在へと変化することも、広義においては「異形化」の例に含まれ、物語における「異形化」のバリエーションは多彩であるといえよう。

しかし、本稿で取り上げる「異形化」は、いくつかの条件を満たしたものだけにする。①肉体をもち、②普通の人間にはない特殊な能力あるいは生態をもち、③人間だった頃と相貌が変化している事例だけに限定する。さらに、その「変化」を見届ける「家族」がおり、家族間に愛情がある（愛情があった）こと、そして「きょうだい」（兄・姉・弟・妹）とのかわりが示されていることを条件とする。

これらの条件をすべて満たす作品は数多あり、たとえば文学作品では、カフカの『変身』などもこれにあたろう。しかし、ここでは現代のポップカルチャー作品から、社会現象にもなったマンガ、『鬼滅の刃』²⁾と『ジョジョの奇妙な冒険』³⁾を事例とし、「家族の異形化に苦悩する兄弟」のエピソードを比較する。

『鬼滅の刃』は「人間」対「鬼」の戦いが主軸の物語である。『鬼滅』に登場する「鬼」の始祖は、植物から作られた薬の副作用によって誕生した。そして、この「鬼」の始祖の血液が人間の体内に入ることによって、一部の人間⁴⁾の肉体が「鬼」へと変化する。本稿では、鬼になった母によって弟妹を喰い殺される悲運を背負った不死川兄弟を例にとる。『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズからは、第4部「ダイヤモンドは砕けない」（1992-1995）に登場する、怪物へと変貌した父の世話をしている虹村兄弟について論じる。

この2作品は、いずれも主人公をはじめとする登場人物たちが、突然、日常生活の中で異形と遭遇することで生命の危機にさらされる物語である。どちらもジャンルとしてはバトルマンガで、それゆえ異形との戦いがストーリーの軸にあるが、その中に「家族の異形化」に苦悩する人物のエピソードが描かれている。「平穏な日常」の象徴であるはずの家に、それを破壊する異形が侵入することと、「家族が異形化」することは似て非なる物語である。「家族の異形化」の物語は何を語るのか。

²⁾ 吾峠呼世晴の著作である『鬼滅の刃』は2016年2月15日から2020年5月18日まで『週刊少年ジャンプ』（集英社）で連載された。コミックスは23巻で完結している。

³⁾ 荒木飛呂彦の著作『ジョジョの奇妙な冒険』は1986年12月2日（1987年1・2月合併号）から『週刊少年ジャンプ』（集英社）で連載が始まり、2005年3月19日から『ウルトラ・ジャンプ』（集英社）に掲載先を移動している。ジョジョシリーズ7部に当たる「スティール・ボール・ラン」執筆時のことだった。2021年8月19日にジョジョシリーズ8部の連載を終え、9部の連載が予告されている。（※2022年3月3日現在）

『ジョジョの奇妙な冒険』は長期連載マンガ作品で、8つのシリーズでは、それぞれ主人公が異なり、シリーズごとに「部」と括られ、のちにすべての「部」に副題がつけられている。第1部「ファントムブラッド」、第2部「戦闘潮流」、第3部「スターダストクルセイダース」、第4部「ダイヤモンドは砕けない」、第5部「黄金の風」、第6部「ストーンオーシャン」、第7部「スティール・ボール・ラン」、第8部「ジョジョリオン」。

⁴⁾ 『鬼滅の刃』の設定では、鬼の始祖である鬼舞辻無惨の血液は、人間にとって有害な毒として作用する場合が多く、鬼の血に適合した者だけが鬼化する。血液を媒介して鬼になるのは『鬼滅の刃』オリジナルの設定である。

II 「異形化」によって生じる「人間らしさ」の喪失

2.1 家族の「異形化」の物語がもたらす衝撃 ―カフカ『変身』

家庭とは人間が日常生活を営む場所で、一般的には「平穏さ」と「平凡さ」の象徴ともいえる。しかし、家庭に突如として恐ろしいものが侵入すると、そこに住む人たちは「日常」を失うことになる。魔物が外部からやってきた場合は、その魔物を駆逐する、あるいは家を捨てて逃げるといった選択肢もあるが、家族が怪物になった場合には、「はたしてこの怪物は家族なのか」という根本的な疑問がわきおこるのだ。家族への情を失わないままに、異形化した家族への対処法を考えると、あらゆる手段に制限が生じる。

1915 年に出版されたカフカの『変身』は、まさしく「異形化」を主題とする作品で、「怪物になってしまった家族」にまつわる周囲の心の変化が描かれているが、ここでは主人公の「醜い変身」にともなって、家族の情が変わってしまう様子が示されている。

―ある朝、グレゴール・ザムザが落ち着かない夢にうなされて目覚めると、自分がベッドの中で化け物じみた図体の虫けらに姿を変えていることに気がついた。

(フランツ・カフカ『変身』、川島隆・訳) ⁵⁾

主人公のグレゴールは、ある日突然、無数の足を持つ「虫けら (Ungeziefer)」⁶⁾に変身していることに気がついた。変わったのは彼の外見だけで、精神は人間の頃のままである。にもかかわらず、グレゴールに対する家族の思いは大きく変化した。彼は家族から死を望まれるようになるが、それとは対照的に、グレゴールの家族に対する情は失われなかった。

―家族のことを思い返すと心が動き、愛情が湧いてくる。自分は消えなければならないという点については、ひょっとすると彼の方が妹よりも迷いのない意見を持っていた。

(フランツ・カフカ『変身』、川島隆・訳) ⁷⁾

この物語が読み手にもたらす驚きは、グレゴールが死亡した後に、「家族はみんな心底せいせいして休日を満喫し、曇りのない喜びに包まれ」⁸⁾たことにある。「虫の姿をした兄」への不快感が、「兄の死」の悲しみをはるかに上回ることが示された。「1 番近い他者」であるはずの「家族」の繋がりが、「醜悪な異形化」という出来事によって簡単に断ち切られる物語の事例である。「家庭」とは何か、「家族」とは何か、という「不安」を読み手に与える衝

⁵⁾ フランツ・カフカ (川島隆訳)『変身』角川文庫、2022 年、p.5。

⁶⁾ カフカ前掲書 (川島隆解説部分)、p.156-157 参照。カフカ研究者の川島隆の解説によると、この Ungeziefer は「人間にとっては有益でない動物一般」を意味し、ドイツ語の原語に含まれる「否定的なニュアンス」を出すために、訳では「虫けら」という語を選んだとしている。

⁷⁾ カフカ前掲書、p.93。

⁸⁾ カフカ前掲書 (川島隆解説部分)、p.172。

撃的な作品であるといえよう。

2.2 「人間でない」こと、「醜い」こと

『変身』の主人公・グレゴールが疎まれた最大の理由は、彼が人間らしさを失ったことにある。加えて、外見に「醜い変化」があったことが、その悲劇に拍車をかけた。ウンベルト・エーコは、彼の著書『醜の歴史』⁹⁾において美醜にまつわるさまざまな形容詞をあげ、「「醜い」の類義語はほとんどすべて、たとえ激しい反感、憎悪、恐怖でないにしても、不快の反応を常に示している」と述べている。そして、排泄物や腐敗がもたらす悪臭を放つ生物を「本質的な醜」とし、全体のバランスに不均衡さをもたらすような特性、不完全さを「形式的な醜」としている。「虫の外見」それ自体も「形式的な醜」であるが、「人間の心」と「異形の姿」というアンバランスさも「形式的な醜」であるといえよう。

民間伝承研究者のマックス・リュートィは、「昔話における呪いは変形（デフォルメ）を意味し、人間は動物の姿に変えられ、ヒキガエルや蛙、ライオン、馬、熊、犬あるいは鴉、しばしば石にもなる。」¹⁰⁾といった。グレゴールの「虫化」には、呪いや魔法、因果関係など、具体的な理由は添えられていないが、まるで呪いのように彼の人生を蝕んだ。

他の例として、『グリム童話集』に収録されている「蛙の王様」¹¹⁾がある。これは美しい王子が魔法によって蛙の姿に変えられた物語である。このメルヒェンでは、蛙のあまりの醜さに、ベッドをとともにせねばならない王女が不快感を我慢しきれず、壁に蛙を叩きつけるシーンが描かれている。しかし、蛙の呪いがとけて元の人間の姿に戻ると、王女は王子（＝蛙）の求婚を受け入れている。「外見の変化」が物語に大きく作用していることがわかる。ただ、『変身』においてはグレゴールの「虫化」は死の瞬間にもとけず、醜い変貌によって悲劇の結末を迎えることになる。

2.3 「家族」と「きょうだい」

「きょうだい」の物語には様々なバリエーションがあり、変身や異形との遭遇にまつわる物語は昔話にも頻繁に描かれる。「兄と妹」¹²⁾という物語では、継母に耐えかねて家出した兄妹のうち、兄が継母の魔法によって鹿に変身させられるが、妹がその兄を守りながら暮らしている。同じく『グリム童話集』に収録されている「7羽のカラス」¹³⁾もカラスになって

⁹⁾ ウンベルト・エーコ（川野美也子訳）『醜の歴史』東洋書林、2009年、p.19。

¹⁰⁾ マックス・リュートィ（高木昌史訳）『民間伝承と創作文学—人間像・主題設定・形式努力』法政大学出版局、2001年、p.83。

¹¹⁾ Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. (Hrsg. von Heinz Rölleke) Stuttgart, 2001, S.29-33. 正式なタイトルは「蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ」*Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich* で、第1話（KHM1）収録作品。

※KHM（*Kinder- und Hausmärchen* の略）の後に番号が書かれているのは、収録話の順番を示している。

¹²⁾ Brüder Grimm, S.79-86. *Brüderchen und Schwesterchen*. (KHM11).

¹³⁾ Brüder Grimm, S.154-156. *Die sieben Raben*. (KHM25).

しまった7人の兄を末子の妹が人間に戻そうとする話である。「異形化した兄」に対する妹の献身は昔話の題材として好まれてきた。

しかし、これに対して男同士の兄弟の物語の場合、彼らは「敵対的」な関係で描かれることが多い¹⁴⁾。グリム研究者の高木昌史によると「敵対の原因は花嫁であれ、妻であれ、妹であれ、その支配欲や所有欲あるいは嫉妬に起因する」¹⁵⁾としている。

これらは、いわゆる民間伝承、メルヒェンという文学ジャンルにおける「兄と妹」「兄と弟」のモチーフの解説である。そのため、物語上の役割が別ジャンルの諸作品と必ずしも一致するとは限らず、『変身』にしても、『鬼滅の刃』や『ジョジョの奇妙な冒険』の「きょうだい」にしても、異なる部分が目につく。しかし、物語で使用されているモチーフの役割と一致しない部分に、その作品の特性があらわれる。カフカの『変身』では仲の良かった妹が、「兄の異形化」によって兄の死を当然のように望むようになる。家族の絆の喪失が造作もなく行われる様子は、人間が突然虫になることよりも不条理であった。

では、『ジョジョ』の虹村兄弟と『鬼滅』の不死川兄弟のエピソードにはどのような特性が示されているのだろうか。

III 『ジョジョの奇妙な冒険』虹村兄弟の事例

3.1 『ジョジョの奇妙な冒険』第4部 —虹村兄弟と「異形化」した父

荒木飛呂彦のマンガ『ジョジョの奇妙な冒険』は長期連載作品で、主人公の変遷とともにシリーズが分かれている。ここでは、東方仗助を主人公とする第4部「ダイヤモンドは砕けない」に登場する虹村形兆と億泰の兄弟を取り上げる。『ジョジョ』シリーズは、第1部・第2部では特殊な呼吸からエネルギーを導き出す「波紋（はもん）」と呼ばれる技を使用して敵と戦う。第3部以降は「幽波紋（スタンド）」という、精神エネルギーを具現化した能力を使うようになる。

虹村兄弟は父とともに住んでおり、兄・形兆が18歳、弟・億泰は15歳という設定である。彼らは主人公の仗助と同じく「スタンド能力」の持ち主で、形兆は「バッド・カンパニー」と名付けられたミニチュア型の軍隊の「スタンド」をもち、億泰は「ザ・ハンド」という空間を削り取る異能をもっている。虹村兄弟の父親も息子らと同様にスタンド能力を持っているが¹⁶⁾、彼にスタンド能力を授けたDIO（ディオ）という人物が死亡した際に、彼の肉体は「怪物化」した。

—「DIOの不死身の細胞が一体化しちゃったんだからな……！最初の日から1年ぐらいでおれたちが息子だっつーこともわからねー肉のかたまりになったのさ！」

（荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』30巻「虹村兄弟 その⑨」）¹⁷⁾

¹⁴⁾ 高木昌史『グリム童話を読む事典』三交社、2002年、p.223。

¹⁵⁾ 高木前掲書、p.223。

¹⁶⁾ 父親のスタンド能力は不明。

¹⁷⁾ 荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』集英社、1993年、30巻、p.153。

兄の形兆が 8 歳の時、弟の億泰が 5 歳の時に父親は怪物化し、それ以降、虹村兄弟は父親を治す手段の模索から、やがて父を安らかに死なせる方法を求めるようになっていく。

3.2 「異形の父」の外見的特徴と変化

虹村兄弟の父親は息子たちのことを判別できなくなり、成人男性としての知性や社会性を失い、声を発することはできるが言葉を失った。外見は爬虫類のような緑色の皮膚、瘤だらけの弛んだ肉体、顔面は左右非対称に崩れていた¹⁸⁾。

彼はディオという魔物(吸血鬼)の手下として金を得る代わりに、ディオにコントロールされやすいように細胞を体内に埋め込まれていたため、ディオの細胞の暴走によって怪物化した。そして、彼はどんなに怪我をしてもすぐに修復されるという特殊な身体になったのだった。彼は「死ねない」化け物へと「変化」した。

—「お…おい！腕が…はえてきたぞッ！」「なっなんだ…？この生き物は…？おれんちの近所に こんなのが住んでたなんて…」

(荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』30 巻「虹村兄弟 その⑧」)¹⁹⁾

偶然に腕が切断された時、虹村兄弟の父はそのちぎれた腕をみずから食った。それを目撃していた少年が「おええええ一つ」と吐き気に堪える場面が描かれている。自分の肉体を貪り食う様子は餓鬼道に落ちた罪人を彷彿とさせ、「人間らしい」感覚を彼が喪失していることを周囲に強く印象づける。

3.3 「人間らしさ」の喪失 —外見・内面

このような父親を虹村兄弟は小学生当時から高校生になるまで、2 人で面倒を見続けたということになる。父親が勝手に徘徊しないようにと形兆に鎖で繋がれてはいるが、清潔な洋服を着せられており、食事への言及などからも十分に世話をされている様子がうかがえる。とくに服を着せているところからは、彼を「人間」として扱おうとしている虹村兄弟の心の揺れを感じ取ることができる。

『ジョジョの奇妙な冒険』の第 4 部は宮城県仙台市をモデルとした杜王町という街で、架空の都市ではあるが現代の日本という舞台設定である。怪物の姿をした父との生活に様々な困難があったことが間接的に描写されており、父の「異形化」が直らないことに、虹村兄弟は疲弊している。カフカの『変身』のエピソードとの類似性が感じられる。

ただここで物語上問題なのは、この父親はグレゴールと同様に、「怪物化」は主に外見だ

¹⁸⁾ これも前述のとおり、エーコがいうところの「形式的な醜」にあたるといえよう。

¹⁹⁾ 荒木前掲書、30 巻、p.140。

けにとどまっているという点である。本来「怪物」とは人間に害をなす存在²⁰⁾であるが、怪物化以前は暴力的だった父が、外見が「異形化」した後には穏和な性格になっており、精神面には大きな問題は抱えなくなっている。周囲に父の姿が目撃されないように隠す必要性はあり、知能と記憶の後退があり、食事と排泄など日々の世話こそ必要であるが、歩行も可能で、身体は健康体である。それでも父親が「普通の人間とは違う肉体を持っている」ことが、虹村兄弟を苦悩させている。肉体的な意味での「人間らしさ」の喪失が、まぎれもなく家族の負担になっている。

3.4 虹村兄弟の「異形の父」への思い

主人公の東方仗助は、スタンド能力「クレイジー・ダイヤモンド」を持っている。仗助の能力は、死んだ者を生き返らせることはできず、病気を治すこともできない。しかし、物体を直すこと、怪我などを治すことが可能である。スタンドはおもに戦闘のための能力であるが、仗助は「治す・直す」力²¹⁾を活用しながら戦う、バトルマンガでは特殊なキャラクターだ。

虹村兄弟が父親の怪物化に苦悩していることを知った仗助は「おやじさんを「治す」…スタンド使いを探してたっつーわけか」²²⁾と形兆にたずねたが、形兆は「それも… …ちがうね……」と呟き、涙を流しながら仗助たちに真意を伝えた。

—「逆だ…おやじを殺してくれるスタンド使いを おれは探しているんだよ〜〜っ」「おやじを「普通」に死なせてやりたいんだ…」

(荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』30巻「虹村兄弟 その⑧」)²³⁾

普通の人間がスタンド能力を発動させるためには、遺伝などの特殊なケースをのぞいて、能力を開花させるための道具である「弓と矢」で傷を負う必要がある。その矢の負傷によっては命を失う者も多い。形兆は「父親を殺すことができる能力者」を求めて、矢傷を負わせた人を死に至らしめていたことがあった。「もうやめよおぜ なあ〜」²⁴⁾と兄を説得しようとする億泰に対して、形兆はそれに素直に同調することができない。

²⁰⁾ ユングは「英雄の第一の仕事は暗闇の怪物を退治することである。」と述べているが、虹村兄弟の父親が犯罪や悪事に加担していたのは、怪物化以前の出来事である。カール・グスタフ・ユング（林道義訳）『元型論』紀伊国屋書店、2009年、p.192。

²¹⁾ 4部がスタートした時に、東方仗助はそれまでのジョジョシリーズの中で最弱の主人公といわれたことがあったが、殺人鬼・吉良吉影によって破壊された杜王町という街の尊厳を仗助が「取り戻す」、平和な状態へ街を「直す」ことがテーマに含まれている。3部の主人公であり、仗助の甥（年齢上の逆転が起きており、仗助の方が年下という設定にある）の空条承太郎は「人間は何かを破壊して生きているといってもいい生物だ その中でお前の能力はこの世のどんなことよりもやさしい」と述べる場面がある。荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』集英社、1992年、29巻、p.111。

²²⁾ 荒木前掲書、30巻、p.144。

²³⁾ 荒木前掲書、30巻、p.144-145。

²⁴⁾ 荒木前掲書、30巻、p.169。

—「おれは なにがあらうと あと戻りすることはできねえんだよ… スタンド能力のあるやつをみつけるため この「弓と矢」でこの町の人間を 何人も殺しちまってんだからな〜」
(荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』30巻「虹村兄弟 その⑩」)²⁵⁾

3.5 模索される「異形化」からの救済

幼い頃から10年にわたって父親の「異形化」に苦悩し続けてきた虹村兄弟が、東方仗助との出会いによって、父親の救済のあり方に新しい希望を見出すようになった。そのきっかけになるのが、父親の「記憶」のエピソードである。

化け物になり、知性が失われてしまった父親は彼のガラクタ箱を一日中「ひっかき回して」いた。「毎日毎日…くる日もくる日も10年間…」と形兆は苛立ちを隠せない。父親に対して、頭が割れ流血するほど殴り、胴体を蹴り上げる形兆を仗助は制止した。そして父親が執着していたガラクタ箱にある紙片を「クレージー・ダイヤモンド」のスタンド能力で直すと、「幸せだった頃の虹村家」の家族写真が修復された。

—「か…家族の写真だ…」「当時の息子たちの写真を探していたんだ… 今のことはわからないのかもしれない でも…彼の心の底には…思い出があるんだよ…昔の思い出が…」

「「殺す」スタンド使いよりよ——「治す」スタンド使いを探すっつーんなら 手伝ってもいいぜ」

(荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』30巻「虹村兄弟 その⑨」)²⁶⁾

身も心も「怪物」になったと思い込んでいた父に、人間らしい「記憶」が残されていることに気づいた虹村兄弟であったが、これまで殺人を重ねてまで「父を殺害できるスタンド使い」を探し続けていた形兆は、その動機と大義名分をここで失うことになる。形兆は自分が見つけ出した邪悪な「スタンド使い」に殺害され、みずからの罪の罰を受ける結果となった。

3.6 虹村兄弟の事例における「兄弟」の役割

昔話における「兄と弟」のモチーフについては前述の通りであるが、虹村兄弟の役割はそれにはまったく当てはまらない。彼らには敵対関係の要素はなく、弟の億泰は基本的には兄の発言に逆らうことはない。兄の形兆も弟のことを「お前は無能だ！」²⁷⁾「いつだっておれの足手まといだったぜ…」²⁸⁾と言いつつも億泰のことを守り続けた。

彼らの関係は「兄と弟」というよりは、疑似的な「父子」関係であるといえよう。妻を亡

²⁵⁾ 荒木前掲書、30巻、p.170。

²⁶⁾ 荒木前掲書、30巻、p.163-164。

²⁷⁾ 荒木前掲書、30巻、p.48。

²⁸⁾ 荒木前掲書、30巻、p.180。

くしてから幼い億泰に手をあげることが多くなった父から²⁹⁾、億泰をかばい続けてきた形兆は、自然と弟の庇護者になっていった。父親が怪物化してからは、長男である彼が主体となって虹村家の生活を管理していたことがうかがえる。本物の父親が「暴力的な人物」から「怪物」へと変容している間も、兄が弟の「父代わり」を担っていた。

『ジョジョの奇妙な冒険』4部の他のキャラクターの家族関係で、「異形化」によって家族に死が望まれるケースはない³⁰⁾。虹村兄弟の最大の懸念は、父親の無尽蔵の肉体修復能力と、彼が「不死」であることだ。虹村兄弟の死後、誰が「怪物」である父の世話をするのか、父親のその後の生への不安が、父の死を模索することへ繋がったのだと考えられる。家族としての愛情があるがゆえの苦悩であり、その苦悩を長男が主体となって背負う—この要素こそが虹村兄弟のエピソードの最大の特徴であるといえる。

IV 『鬼滅の刃』不死川兄弟の事例

4.1 『鬼滅の刃』の「鬼」の特徴と不死川兄弟

不死川兄弟は、鬼にまつわる数奇な運命に翻弄された。彼らは幼少期に父を亡くして³¹⁾おり、働き者で優しい母親に育てられたが、その母親が鬼化させられ、長男の実弥、次男の玄弥以外の弟妹がすべて、その母親に殺害されている。暗闇で襲いかかってきた母親の姿はシルエットで描かれており、外見的な特徴は不明瞭であるが、襲われた傷の様子から鋭い牙と爪に変化していること、その他の描写から目に鬼化の特徴を示していたこと³²⁾は推測できる。

この事件を契機として、長兄の不死川実弥は鬼を滅殺するための鬼狩り組織「鬼殺隊」への入隊を果たし、鬼殺隊の隊士の中で頭角をあらわして「柱」と呼ばれる主力メンバーにのぼりつめる。一方で、弟の玄弥は鬼殺隊の剣士に必要な能力である、鬼を討伐する際に使用する武具「日輪刀」を色変わり³³⁾させることができず、鬼狩りとしての才能の欠如に苦悩す

²⁹⁾ 荒木前掲書、30巻、p.151。

³⁰⁾ 作中では他に「家族の異形化」によって苦悩する人物に川尻早人という少年が登場するが、彼の場合は「殺人鬼が自分の父親になりすましていた」というケースのため、「異形化した人物」との間に家族らしい愛情はない。

³¹⁾ 不死川兄弟の父親は素行が悪く、争い中に刺されて死亡している。死後の父親と邂逅する場面では父親らしい様子を見せるものの、生前には父親らしいエピソードは記されていない。本当の父親が「父親としての役割」をはたしていない点で、『ジョジョ』の虹村兄弟と共通性がある。

³²⁾ 襲われた子どもたちには、武器を持たない不死川の母によって胴体が切断された者もあり、母親の異形化は顕著である。また『鬼滅の刃』において目にまったく変化がない鬼はおらず、そのことから不死川の母の目にも変化があったであろうと思われる。13巻のシルエットでも目は特徴的に縁取りがされている。吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2018年、13巻、第115話参照。

³³⁾ 鬼殺隊の剣士が使用している刀・日輪刀は、持ち主である剣士の戦闘力の性質に合わせて変色する特徴がある。（この戦闘力の性質は、「呼吸」と呼ばれる技と連動しており、呼吸の種類には、「岩・水・炎・風・音・蟲・恋・蛇・霞」があり、その他にも「雷、獣、花、日、月」などがある。）その才に恵まれていない隊士が剣を持つと、日輪刀の色は変

ることになる。

体格にも恵まれていなかった玄弥であったが、彼は「鬼喰い」の才を持っていた。彼は「鬼を喰うことにより一時的だが鬼の体質になれる」³⁴⁾という特殊能力の持ち主で、「鬼喰い」を繰り返すことによって、身体の鬼化が進んでいく。顔面に浮き出る血管、目の変化、そして口元には牙がはっきりと見えていた。さらに言動も凶暴化しており、ここであらためて『鬼滅』に登場する鬼たちは、外見的な変化だけでなく、精神にも鬼化の影響が色濃く出るということが読者に示される。『変身』のグレゴールや『ジョジョ』の虹村兄弟の父親とは、凶暴性という点で大きく異なる。

4.2 家族の「異形化」を見届ける長兄・不死川実弥の思い

弟妹を守るために鉈で「鬼」と戦った長兄の実弥は、朝日の中で自分が殺害した「鬼」が母親であったことを知って立ち尽くす。追い討ちをかけるように、母と弟妹の死亡で混乱していた玄弥が兄のことを「人殺し」となじった。

—「何でだよ！！ 何でだよ！！ 何で母ちゃんを殺したんだよ！！ うわあああ 人殺し！！ 人殺しーっ！！」

(吾峠呼世晴『鬼滅の刃』13巻・第115話「柱に」)³⁵⁾

不死川実弥による「母殺し」の場面では、実弥の表情は終始「母親の鬼化」に驚く様子しか描かれておらず、彼の後悔や悲しみの場面は後ろ姿と遠景のみで、その表情がわからないようにされている。その後、実弥は玄弥が生命の危機に陥る場面まで、「母殺し」の時の気持ちも、弟への愛情も語ることはない。「テメエみたいな愚図 俺の弟じゃねえよ 鬼殺隊なんかやめちまえ」³⁶⁾と玄弥を突き放し、弟を鬼との戦いから遠ざけようとした。しかし、弟が敵に攻撃された時には、身を挺してかばおうとする³⁷⁾。

—「…テメエは本当に どうしようもねえ弟だぜえ 何の為に俺がァ 母親を殺してまで お前を 守ったと思ってやがる」

(吾峠呼世晴『鬼滅の刃』19巻・第166話「本心」)³⁸⁾

この実弥のセリフからは、鬼化した母親を殺害した時点で、鬼＝母であることを実弥自身

わらない。鬼殺隊実力者である炎柱・煉獄杏寿郎の弟も日輪刀の色が変わらず、「炎の呼吸」を継承することを断念している。

³⁴⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2018年、14巻、第124話。(以下、『鬼滅の刃』のコミックスにはページ数表記がないため、引用箇所は話数の表記をもってそれに代える。)

³⁵⁾ 吾峠前掲書、13巻、第115話。

³⁶⁾ 吾峠前掲書、13巻、第113話。

³⁷⁾ 『ジョジョ』では虹村形兆も「レッド・ホット・チリペッパー」による電流の攻撃から弟を守っているシーンがある。この時、形兆は死亡するが、億泰は助かっている。

³⁸⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2020年、19巻、第166話。

がわかっていたようにもとらえられる。あるいは、その段階では確信はなかったとしても、死にゆく母を見た時に、自分が行った行為が「兄弟を守るための母殺し」だったことを認識していることは明らかである。母が弟妹を攻撃（殺害）する行為によって、実弥は母のことを人ではなく「鬼」とみなした。玄弥が母の鬼化を理解するよりも判断が早い、これは実弥には「弟妹を守らなくてはならない」という長兄としての意識が強く働いているものと思われる。不死川実弥もまた父親不在の家庭の長男であり、「父代わり」の役割を担っている。

4.3 鬼と人間の境界線

その一方で、鬼と戦う力を得るために「鬼喰い」を繰り返し行い、鬼化が進んだ弟に対しては、実弥はどのような感情を抱いていたのか。

—「どうなってる畜生ッ！！ 体が… なんで鬼みたいに体が崩れる ああああ クソッ！！クソッ！！」「頼む神様 どうかどうか弟を連れて行かないでくれ お願いだ！！！」
(吾峠呼世晴『鬼滅の刃』21 巻・第 179 話「兄を想い 弟を想い」)³⁹⁾

これらの実弥のセリフから浮かび上がるのは、自分の子どもを喰い殺そうとした母は「鬼」、人間を守る力を身につけるために鬼化した弟は「人間」であるという実弥の認識である。鬼化した人間は絶命の際に、身体が塵のように砕け散って消滅する。人間のように遺体は残らない。崩れ落ちる弟の肉体を、かき集めるように胸に抱きしめようとした実弥であったが、最愛の母の死に際しては、その死体に手を触れようとはしていなかった。

何が「鬼」と「人間」との境界線になるのか。『鬼滅の刃』における鬼と人間の定義は、物語の初期ですでに主人公の竈門炭治郎のセリフでなされている。2 巻で炭治郎は、多くの人間を喰った残酷な鬼が消滅する際に、明らかに「鬼の手」である巨大な醜い手を握りしめ、「神様どうか この人が今度生まれてくる時は 鬼になんてなりませんように」⁴⁰⁾と祈っている。さらに 5 巻では水柱・富岡義勇から「人を喰った鬼に情けをかけるな 子供の姿をしていても関係ない」⁴¹⁾と諭された時、炭治郎はこんなふうに答えている。

—「勿論俺は容赦無く鬼の頸に刃を振ります だけど鬼であることに苦しみ 自らの行いを悔いている者を踏みつけにはしない」

(吾峠呼世晴『鬼滅の刃』5 巻・第 43 話「地獄へ」)⁴²⁾

³⁹⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2020 年、21 巻、第 179 話。下線は論者が引いた。

⁴⁰⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2016 年、2 巻、第 8 話。下線は論者が引いた。

⁴¹⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2017 年、5 巻、第 43 話。鬼殺隊の上位実力者は「柱」という称号が与えられるが、富岡義勇は「水の呼吸」の使い手のため、その呼吸から「水柱（みずばしら）」と呼ばれる。注 23 参照。

⁴²⁾ 吾峠前掲書、5 巻、第 43 話。

『鬼滅の刃』において、人から「人間の敵＝鬼」と認識される境界線は、進行形で⁴³⁾「人間を喰っているかどうか」にかかっている。その上で、前述の 2 巻と 5 巻の場面に共通するのは、人喰いの鬼が死の間際に「人間時代の記憶」を取り戻す場面が挿入されていることである。「人間時代の記憶」が「人間への愛情」と結びついた時、肉体の鬼化についてはいったん不問とされ、「人間」とみなされるようになる。これが『鬼滅』という作品の「異形化」で、最も考慮しなければならない点である。

4.4 鬼化という「異形化」からの救済

『鬼滅の刃』では一度鬼になると、人間に戻ることは困難であった。主人公・竈門炭治郎の妹である禰豆子、鬼に取り込まれてしまった炭治郎は、その後開発された「人間に戻る薬」⁴⁴⁾によって、人間の身体を取り戻している。ただし、不死川玄弥は、鬼の始祖によって鬼化させられた竈門兄妹たちとは異なり、自分の意思によって「鬼喰い」を行い鬼化している。喰うタイミングや量は本人がコントロールできるため、記憶の欠損もなく、感情もやや攻撃的になる範囲でおさまっており、「完全なる鬼化」とは異なるといえよう。しかし、鬼化の影響によって身体の成長がいちじるしく、折れた永久歯が再び生えてくるなどしており、「鬼喰い」を中断してもある程度の変化が残ってしまうようだ。

玄弥の肉体が鬼化への過渡期であることをふまえ、玄弥が完全に「鬼」にならずにすむためには、いかなる条件が必要になるのか。

—「ごめん兄ちゃん 謝れないまま俺は死ぬ 兄ちゃんに笑いかけてもらった時の 都合のいい走馬灯を見て 俺 才能なかったよ 兄ちゃん 呼吸も使えないし 柱にはなれない 柱にならなきゃ柱に会えないのに 頑張ったけど無理だったよ」

(吾峠呼世晴『鬼滅の刃』13 巻・第 115 話「柱に」)⁴⁵⁾

玄弥の鬼化の動機は、兄が自分たちを守ろうとして母を殺害した時に投げかけた「人殺し」という言葉を謝りたいという思いに集約されている。謝罪の機会を得るために、自分も鬼殺隊の柱になり、風柱である兄との再会を望んだ。よって、「兄との対話」が玄弥の鬼化を止める契機になりそうではあるが、日々、鬼による一般市民の被害を出している『鬼滅の刃』の世界において、鬼殺隊の主力である実弥が戦いをやめる可能性は極めて低く、戦いに玄弥を巻き込みたくない実弥が弟と対話することは難しい。また、すでに鬼化によって鬼殺隊の主力戦力の一員となっている玄弥も、兄や鬼殺隊の仲間を見捨てることもできず、戦いの舞

⁴³⁾ 鬼の珠世という女性は過去に人間を喰った時期があったが、その後、自らの行動を悔い、医師としての知識を生かして人間を喰わずに生きながらえる方法を見つけている。珠世は人喰いの過去を持ちながら、鬼殺隊からも人間の味方であると認められている。

⁴⁴⁾ 注 32 であげた医師の鬼・珠世と、薬学に精通している蟲柱・胡蝶しのぶがそれぞれに「人間に戻る薬」を作ること成功している。珠世の作った薬は、浅草で鬼化させられた市民の男性も人間に戻している。

⁴⁵⁾ 吾峠前掲書、13 巻、第 115 話。

台から降りることは困難だった。作品中では、鬼の始祖を滅して戦いの連鎖を止めることだけが、世界を鬼化から救済する唯一の方法として提示される。

V 「異形化」がもたらす影響の比較

5.1 異形化した家族を殺害しようとする動機① 残された家族

『ジョジョの奇妙な冒険』の虹村兄弟の父親の「異形化」は、怪物となった父を救おうとする「父殺し」のエピソードを生み出した。『鬼滅の刃』の不死川兄弟の母の「異形化」は「母による子殺し」と「母殺し」の事件を引き起こした。父親を殺す決意をし、殺人にまで手を染めたのは長兄の虹村形兆であり、母親を殺害したのも長兄の不死川実弥であった。「残された弟」を救いたいという思いが、その動機の中に隠されている。

形兆も実弥も長男という立場から、「異形の殺害」は自分が主体で行おうとしており、弟を遠ざけようとしている点でも共通している。両家族とも、父親が「父親としての役割」をはたせておらず、長兄が「父代わり」として行動をとっており、また、その状況になった当時は、形兆も実弥もまだ子どもであったことが特徴的である。つまり、物語上「父代わり」である彼らの判断は不完全であり、虹村兄弟と不死川兄弟の悲劇は彼らが「子ども」であったことにも関連していると思われる。

『変身』のグレゴールの描写と異なるのは、彼らの「子ども時代」が絵で示されるため、彼らの「幼さ」が強く印象付けられることだ。幼い長男が父代わりになろうとする、命を捨てて自分とわずかにしか年齢の変わらない年下の「きょうだい」を守ろうとする点が、『ジョジョ』と『鬼滅』の兄弟エピソードの特徴である。

5.2 異形化した家族を殺害しようとする動機② 寿命の問題

『ジョジョの奇妙な冒険』で虹村兄弟が父親を殺害しようという考えに至ったのは、父親が「不死」に近い存在になってしまったことも原因のひとつである。病気にならず、飢餓や怪我にも耐えうる「怪物の肉体」に、子どものような知能を持った父親は、誰かの世話を必要とする。虹村兄弟に何かあった場合、彼の父親を隠す人物も守る人物も不在となり、「異形の父」が苦境に立たされることが予想される。虹村兄弟の父に感情があることを息子たちはわかっており、「父を安らかに死なせる」ことへの責任を形兆は強く抱くようになった。

『鬼滅の刃』では、不死川兄弟の母親は、鬼化への理解が十分になされていない段階で殺害されており、ここでは寿命の問題は直接的には関係していない。しかし、『鬼滅』の鬼は限りなく「不老不死」に近い化け物として描かれており、そのエネルギーを供給するために人間を喰う必要があることもあいまって、玄弥の鬼化を誰も望んではいない。

つまり『ジョジョの奇妙な冒険』と『鬼滅の刃』において、「不老不死」は「異形化」の象徴であり、それがポジティブな要素としては描かれていないということがわかる。

5.3 異形化した家族と「記憶」

カフカの『変身』のグレゴールにせよ、『グリム童話』の蛙になった王子にせよ、彼らに対する他者の残酷な視線は、人間が人間以外の生命体に向ける「命の序列」意識にはかならない。哲学者の金森修は著書『動物に魂はあるのか』⁴⁶⁾において、人間が動物の命に対して投げかける視線の変遷について論じている。デカルトの提唱した「動物機械論」の影響によって、「動物にいかなる憐れみもかけられることがなくなった」時代を紹介し、生きたままなぶり殺しにされる動物たちの悲鳴に人々が無関心だった頃の様子⁴⁷⁾について詳細に解説している。

『ジョジョ』で虹村形兆が「怪物」になった父親へ殴打を繰り返したのは、父が「人間ではない何か」に変質したせいである。しかも、その傷は瞬く間に修復され、彼の悲鳴は言葉にはならないため、そこにあるはずの意思疎通も希薄である。さらに怪物化する以前の父親が、虹村兄弟に対して暴力を日常的にふるっていたことも関係していた。しかし、東方仗助の助力によって怪物の父親に記憶が残されていること、息子たちを愛していたことが明らかになり、それを契機として目の前にいる怪物が「人間」であること、さらに彼らの「父親」であることが再認識されるようになった。

『鬼滅』においても、人間の理性を失い、罪の意識なく人を殺害していた鬼たちが「記憶」を取り戻すことで、「鬼としての生」に後悔する場面が多数描かれている。のちに不死川実弥が仮死状態に陥った時に亡くなった母と邂逅する場面があるが、「我が子を手にかけて天国へは…」と後悔を口にする母に、実弥は笑顔で「お袋背負って地獄を歩くよ」⁴⁸⁾と声をかけている。

このように『ジョジョ』と『鬼滅』では、「人間らしさ」の特徴に「記憶と愛情の結びつき」が重視されていることがよくわかる。そして、愛した人物に「人間らしさ」を再発見することさえできれば、外見的な「異形化」がもたらす苦難を乗り越えることが可能であることが示されている。

VI おわりに

なぜ『ジョジョ』の奇妙な冒険の虹村兄弟と、『鬼滅の刃』の不死川兄弟の事例から、家族の「異形化」の悲劇を論じようとしたのか。人間の不安と恐怖をかき立てる異形の存在は、本来、駆逐されることが当然とされる。ましてや、休息の場である「家」に異形が入り込んだ場合、感じるストレスが相当のものであることは容易に想像できる。「家族の異形化」は「終わりの物語」だ。

『変身』のグレゴールは家族に不快な存在と認識され、文字どおり「虫けら」として死を望まれた。家庭での役割を担えなくなった途端に、家庭の中で生きることすら認められなくなることを描いた物語は、人々の心を不安にさせたが、同時にそういった人間の心の

⁴⁶⁾ 金森修『動物に魂はあるのか』中公新書、2012年。

⁴⁷⁾ 金森前掲書、p.81。

⁴⁸⁾ 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2016年、23巻、第200話。

働きが「真実」であることも突きつけ、時代に広く受け入れられた。その一方で、『ジョジョの奇妙な冒険』と『鬼滅の刃』は、家族の愛情が想像もできない事態にも打ち勝つことを描いた物語であった。虹村兄弟と不死川兄弟のエピソードは、「不死性」と「外見の変化」によって象徴される「異形の物語」をテーマとして日常の破壊を描き、「記憶」こそが人間らしさの根源であると示すことによって、家族の愛にまつわる「物語の力」を回復させたといえよう。

参考文献

- ・荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』集英社、2021年。（1992-1996年も参照している。）
- ・吾峠呼世晴『鬼滅の刃』集英社、2020年。（2016-2019年も参照している。）
- ・金森修『動物に魂はあるのか』中公新書、2012年。
- ・高木昌史『グリム童話を読む事典』三交社、2002年
- ・馬場あき子『鬼の研究』ちくま文庫、1999年。
- ・ウンベルト・エーコ（川野美也子訳）『醜の歴史』東洋書林、2009年。
- ・カール・グスタフ・ユング（林道義訳）『元型論』紀伊国屋書店、2009年。
- ・フランツ・カフカ（川島隆訳）『変身』角川文庫、2022年。
- ・マックス・リュートィ（高木昌史訳）『民間伝承と創作文学—人間像・主題設定・形式努力』法政大学出版局、2001年。
- ・Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.
- ・Manfred Lurker: *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart, 1991.

付記

*本研究は、神戸大学国際文化学研究推進センターの2021年度研究プロジェクト「新しい〈神話的物語〉の創生と日本ポップカルチャー」と関連する研究成果で、研究プロジェクト助成を受けたものです。

*本研究はJSPS 科研費 JP18K00506 の助成を受けたものです。